

# 「女神」誕生

— 建国神話としての『緋文字』 —

神 徳 昭 甫

「光」と「影」、明暗のコントラストが際立つ小説『緋文字』<sup>1)</sup>にあって、とりわけ鮮烈な印象を与える冒頭の処刑台シーンは次のように始まっている。

獄舎の扉が中から開け放たれ、まず初めに日光の中に黒い影が射すように教区吏の陰気で不気味な姿が現れた。(52)

一方民衆のお目当てヘスタ自身の姿も

若い女性は長身で大柄、この上なく優雅な姿をしていた。黒く豊かなその髪には日光をキラキラと跳ね返すほどの艶があった。(53)

と、明暗のイメージを交えてその輪郭が明らかにされているが、ここではまず、この「東洋的な」黒髪の女性（ダーク・レディ）は、金髪・碧眼の女性（フェア・レディ）と並んで、ホーソーンが描く女性の二つのタイプの一方を代表するものであること（Rahv368-9）を確認しておきたい。次に「ヘスタを前から知って彼女の落胆して萎れた姿を見れるものと予想していた人々は、逆にその美しさが光り輝くのを見て仰天した」(53)と述べられている。

従ってたとえそれが彼女の胸を飾る緋文字の持つ魔力によって「その身にまわりついた不幸や恥辱が後光となって照り輝いた」(53、傍点筆者)ためであったとしても、そのようなヘスタの姿から我々が光背を戴いた仏像、もしくは『古事記』の中の、あのタジカラヲに手を引かれて岩戸を出てくるときのアマテラスの姿を連想したとしてもさほど不自然ではあるまい。

『古事記』の「天の岩戸」の場面を引いてみよう。これは岩屋の前に集まった八百万の神々が、ちょうどアメノウズメの滑稽な踊りを見てどっと笑ったため、不思議におもった「女神」が自分以外の新しい神が出現したために世の中は浮かれ騒いでいるのであろうか、と訝りながら岩戸を少し開けた、という行である。

天照らす大御神いよよ奇しと思ほして、やや戸より出てて臨みます時に、その隠り立てる手力男の神、その御手を取りて引き出しまつりき。……かれ天照らす大御神の出でます時に、高天の原と葦原の中つ国とおのづから照り明りき。(『古事記』34)

太陽女神アマテラスの「神話」は、「太陽消失と再出現の神話」として、ことに太平洋の周辺地域に分布しているものである(松村34;石田60)が、この神話の解釈をめぐっては「日蝕」をその起源とする説と、「靈魂振り」(冬至期における衰えた太陽の力を復活させる儀礼)を原型とみなす二つの説に分かれ後者の方が有力視されている(多田106-7)。

ともかくここで「日本神話」と小説『緋文字』の類似点<sup>2)</sup>を整理して図示してみよう。

『緋文字』	『古事記』
牢獄	天の岩屋
マサチューセッツ植民地の群衆	八百万の神々
女達の怒り・批判	アメノウズメの踊り
教区吏	タジカラヲ
ヘスタ	アマテラス

むろんヘスタが教区吏の手を振り切って一人で出てくるのに対し、アマテラスはタジカラヲに手を引かれ先導を許すという対照の妙を、これに加えることができよう。

しかしながら、「緋文字」は「地獄の火」(infernai fire)であり「毒々しい光を放った」(69)とあるように、ヘスタを取り巻く「後光」(halo)は、アマテラスの晴朗な天上の光と正反対の性質のものであることもつけ加えなければならない。事実このあと、パールと「日光」の親近性がしばしば強調されるのとは逆に、ヘスタから光は遠ざかる。それは「緋文字」という「牢獄」に幽閉されている限り彼女に陽が射すことはあり得ないからである。

ところで、「母」としてのヘスタとパールに似た存在を今度は「ギリシャ神話」の中に求めてみる<sup>3)</sup>と、デメテルとペルセポネの母娘が好一対の関係として浮上して来よう。呉茂一の『ギリシャ神話』より、ホーマーの「デメテル賛歌」を要約してみる。

ペルセポネ(コレー)がある日、花摘みをしているとき、地下(死=暗黒)の王ハデス(プルートー)に見初められ、誘拐される。最愛の娘が行方不明になって「嘆き悲し」んだ穀物神デメテルは、ハデスが略奪者であり、しかもこの事件は兄であるゼウスが一枚絡んでいることを知って「激怒」する。こうして彼女は「失われた娘」を求めて「松明」を片手に世界中を探し回る。女神が本分を怠ったために早魃とそれに続く大雨によって大地から実りが奪われ、森の木々は緑の葉を枯らし、地上は恐ろしい飢饉に見舞われて神々や人

類は困り果てる。ここでゼウスが仲に入ってハデスとデメテルの間に協定が結ばれペルセポネは一年の三分の一は暗黒の地下で、残りの三分の二は母神と一緒に地上で暮らすことになり、大地は再び豊かな穰りをもたらすことができた。(呉152-8)

この物語は地中に埋もれたペルセポネ（穀物の霊＝種の意）が「春」の日光によって母親のいる地上に連れ戻される、つまりは季節の循環と植物の再生を述べる寓話に他ならないが『緋文字』の場合、ヘスタもまた愛する娘パールを「キリスト教徒にふさわしい教育」を施すという名目で母親の手から引き離そうとするピューリタン社会のお歴々の画策を必死になって阻止している<sup>41</sup>。なお、よくいわれることであるが、このデメテルの神話は「天の岩戸」神話にもソックリとあっていいほどよく似ているのである。なぜなら、ハデスによる娘の「略奪」にデメテルが「激怒」した結果、早魃を招いたように、アマテラスが「岩屋」に引き籠った（アルカディア地方のピガリア市の伝承ではデメテルも洞穴に隠れる）（吉田『ギリシャ神話と日本神話』36-7）原因は、弟のスサノヲ（ハデスもデメテルの弟）の数々の「乱暴・狼藉」にアマテラスが「激怒」したためであるからだ。このスサノヲの決定的な「悪ぶる態」について『古事記』は次のように記す。

なほその悪ぶる態止まずてうたてあり。天照らす大御神の忌服屋にましまして神御衣織らしめたまふ時にその服屋の頂を穿ちて、天の斑馬を逆剥ぎに剥ぎて墮し入るる時に、天の衣織女見驚きて梭に陰上を衝きて死にき。かれここに天照らす大御神見畏みて、天の石屋戸を開きてさし隠りましき。ここに高天の原皆暗く、葦原の中つ国悉に闇し。これに因りて、常夜往く。（『古事記』33）

つまり、スサノヲが皮を剥いだ血みどろの馬を屋根から投げ込んだので、それを見た織女の一人（ワカヒルメ）が、驚きの余り、手に持っていた横糸を通す道具である梭を自分の女性器に突き刺して死んでしまったというのである。しかも「ワカヒルメ」（稚日女）というのはアマテラス（オオヒルメノムチ＝大日靈貴）と同一人物だという（山上35）。

先の引用と同じ場面を『日本書紀』ではさらに一步踏み込んで

是の時に天照大神驚動たまひて、梭を以って身を傷ましむ。（黒坂56）

と、アマテラス自身が怪我をしたことにしており、これについて比較神話学の吉田敦彦氏は「大御神はスサノヲの乱暴によって秘処を毀傷され、凌辱にほとんど等しいと言えるような害を受けたらしいことが窺われる」（『日本神話の特色』54）と述べているのだが、これはアマテラ

スと弟スサノヲの「近親相姦」を暗示しているものと思われる。ギリシャのアルカディア地方に伝わる神話においても、先に述べたデメテルは「娘ペルセポネをさがして世界中を旅しているとき、ポセイドンがこれを認めて恋情に燃え、挑みかかった。女神はその勢いを恐れ、姿を変えて牝馬になったところ、ポセイドンも牡馬になって、ついに思いを遂げた」（呉161-2）とある。デメテルとポセイドンは姉弟であり、アマテラス、スサノヲの関係と正に瓜二つといえるほど酷似している。先の吉田敦彦氏は「ほとんどの文化の中で近親相姦は、もしも通常時に遂行されれば、たちまち世界秩序が紊乱して混沌の状態が現出されると信じられている。正常時においてこのように秩序を混沌に変える異常な破壊力の源泉となる近親相姦は、それ故、原古の時や異常の時空間において遂行される場合には反対に、混沌から世界、あるいは新秩序を生み出すための原動力として作用すると信じられたのである」（『日本神話の特色』58）と述べ、世界中の殆どすべての神話の中で「近親相姦」の遂行が語られている、その理由を憶測している。

植民地時代（建国期といってもよい）を描いたホーソーンの小説、『緋文字』の背後にあるのは、むしろ「近親相姦」ではなく「姦通」事件である。しかしレスリー・フィードラーも看破しているようにこの小説に内蔵されているのは「姦淫に仮装した近親相姦」（Fiedler232）であり、筆者は、これまで述べた日本やギリシャ神話の姉弟間の「近親相姦」と同じく、ヘスタとディムズデルは「姉」（母の代理）と「弟」の間柄であると仮定したら、『緋文字』を覆う「謎」とその異常な迫力の少なくともその一端は解明できるのではないかと思うのである。

すなわち皮を剥いだ血まみれの馬を投げ込んでアマテラスを傷つけたスサノヲの「乱暴」と、それから自身もまた馬になって「陽根をデメテルの女性器に突き立てたポセイドン」の行為、これは『緋文字』におけるヘスタとディムズデルの「姦通」に対応しているのではないだろうか。

しかしそれではなぜ「近親相姦」ではなく「姦通」なのか。ホーソーンが『緋文字』執筆中に典拠としたジョセフ・B・フェルトの『セイラム年代記』には1681年3月29日の日付で次のように記載されている。

近親相姦の罪で二人の女性が一晚拘留されたあと、管刑もしくは5ポンドの罰金を払い、さらに次の説教日の礼拝の間中、セイラム教会の通りの真ん中で、台の上に大文字で罪状を記した紙を頭の上にかざしたまま立っているか、座っているかしていなければならない、との判決を受けた。（Felt270）

ホーソーンと実姉エリザベスのあいだに「近親相姦」関係を想定<sup>5)</sup>して『ホーソーンの秘密—語られなかった物語』を著したフィリップ・ヤングは「それではその二人の女性とは一体何者

だろう、またその相手は誰だろう」(Young121)とホーソーンは興味を抱いたに違いない、と推理し、更に「某年某日ホーソーンはワシントン・ストリートを歩いていたに違いない」と断言する。ホーソーンの時代、裁判所は現在のワシントン・ストリート(当時はスクール・ストリートと呼ばれていた)にあったのである。

ともかく、今から三百年前の、その古い裁判記録にはホーソーン自身の母方の先祖に当たるマニング家の初代、長兄ニコラスと二人の妹、アンティス、およびマーガレットが「近親相姦」の罪で処罰された、と記されていた(Young125-6)。

ホーソーンとしては、自らの家系の汚点とも考えられる、あのセイラムの「魔女裁判」事件同様、それより十年前の、「祖先の罪」(原罪といってよい)を「史実」としてソックリそのまま描く勇氣は当然ながら持ち合わせていなかった。結局「姦通」という、やや衝撃度が小さい「罪」が、これに替わって選ばれたのであろう。

以上、「ギリシャ神話」、「日本神話」と『緋文字』との類似関係を探ってきたが、ここでこれら二つの国の神話との決定的な相違を考えておこう。上記二つにあつて、『緋文字』にないもの、それは「笑い」の要素に他ならない。この小説は、重苦しい迫力と「アイロニー」に満ち満ちているが、ユーモアに乏しいのがその特徴である。例えば『古事記』(『日本書記』にはない)では、「岩屋」の前でアメノウズメが「秘部を露出」したことで神々がどっと笑い立て、アマテラスの関心を惹いたように、デメテルの神話でも「娘を探して放浪中、エレウシスの王、ケウレスの館に招かれ、様々な歓待を受けても、女神は飲食を断って嘆き続ける。そこで侍女のイアンベ、もしくはパウボーという女性が、衣の裳をまくって陰部を露わにしたところ、女神は陽気に笑いこぼして元気を回復した」(『ギリシャ神話と日本神話』37; アポロドーロス36)という。あらゆる娯楽が禁止されたピューリタンの社会にこうした猥雑なまでの大らかな「哄笑」がないのも当然で、「メリーマウントの五月柱」(1835)に描かれたような「逸楽の徒」は、断固追放されなくてはならなかったのである。

さて処刑台に登ったヘスタに目を移してみよう。まず、彼女の頭上、教会のバルコニーには、ピューリタン社会を代表する総督、牧師、政治家、軍人などの支配者が並んでいる。さらにそこから少し離れたところでは彼女の立っている台を取り囲むようにして十重、二十重の民衆の環が出来上がっていることがわかる。「ヘスタ(緋文字)を中心に置いた、この『同心円』は、この小説の構造を示すと共に凶らずも、このピューリタン神政社会の階級を露呈する環となっていることが明かだ。すなわち中心に近い環に属するほどその人の地位は高く、また中心から遠ざかるにつれて、その人の社会的な地位は低いわけである。この同心円は、究極的には太陽系の惑星の『運行図』の反映(神徳『ホーソン文学の両義性』78-9; 178-8)であり固定的で流動性を欠いた当時の身分制度が示されているよう。

ところでこの「民衆の環」の最後尾(the outskirts of the crowd)、つまりこの同心円の

一番外側の環には、今しもこの植民地に到着したばかりのインディアンとその連れの人々の姿が見受けられる。この白人の男、ロジャー・チリングワースが、台上の女性を妻ヘスタ・プリンと認知した瞬間、彼を襲ったその計り知れない衝撃の大きさを、作者は独特の極めて的確なイメージを駆使して次のように表現しているのだ。

蛇がスルスルとそのうえを滑るかのように、恐怖の余りひきつるような歪んだ痙攣が彼の顔を走ったかと思うと、それは一瞬、静止したすぐそのあと、誰の目にもハッキリわかるほど、グルグルと何重にもとぐろを巻いた。(61)

この直後、この顔面の「蛇」は、チリングワースの「意志」の力によって押さえつけられ、いったん姿を消したあとは、彼の胸の中をその住処とするわけである。

キリスト教で蛇は、サタン（悪魔）と同一視されるほど忌み嫌われてきたことは『旧約』の「創世記」にある通りであるが、こののちディムズデルと起居を共にするようになってからのチリングワースの容貌は、極めて醜怪なものへと変貌して、彼はサタンそのもの、もしくはその代理人と噂されるようになるのである。

ところでチリングワースのように先住民インディアンの「秘法」（呪術＋薬草術）に長じた「メディスン・マン」（呪い師、呪術師、祈祷師）は、ミルチャ・エリアーデのいう、広義の「シャーマン」に相当するようと思われる。エリアーデによれば、シャーマニズムとは「厳密な意味ではシベリアおよび中央アジアにおいて顕著な宗教現象である。それはロシア語を介してツングース語 Šaman に起源を持っている。……中央および北アジアの広大な地域全体では、社会の呪術・宗教生活はシャーマン一身に集中している。エクスタシーがとりわけ宗教的体験とみなさる、この広範な領域においては、シャーマンのみが一人、エクスタシーを統御する大家なのだ。従ってこの複雑な現象の第一義として、シャーマニズムはエクスタシーの技術である、と言ってもおそらく何ら差し支えあるまいと思う。最も初期の頃に中央アジアや北アジア各地を旅した人々が、シャーマニズムをこのようなものとして記録し報告したのである。その後、同様の呪術・宗教現象が北アメリカ、インドネシア、オセアニアおよび他の至るところで観察された」（Eliade 4-5）としている。エリアーデの考えでは「エクスタシー（脱魂）がなければシャーマンとはいえない」ことになるが、しかし現代宗教人類学では、これをもっと広義に解釈して「『神秘家』、『予言者』、『霊媒』、『治癒師』、『呪術師』はすべてシャーマンのカテゴリーに入ることになる」（佐々木71）としているのである。

結果的にディムズデルはチリングワースの魔の手から抜けだし、あるいはヘスタの提示したアメリカ脱出という「誘惑」をも振り切って、罪を告白し「勝利」の笑みを浮かべながら死んでいくわけであるから、この小説は見方によっては、インディアンの「秘術」に通じた「メ

ディスンマン」チリングワースの「妖術」と、ディムズデールの「靈力」の戦いであり、「シャーマニズム」に対するキリスト教の勝利（辛勝）を描いた作品であると言えるだろう。

ところで「緋文字」の女、ヘスタもまた、この社会では悪魔の弟子たる「魔女」の一人とみなされたことはいままでのない。「ホーソーン文学では、シャーマンという語は一度も使われていないものの、『魔女』（witch）、『魔法使い』（wizard）という言葉がほぼそれに相当しているとみなしてよかろう」（神徳『日米文学の中の「生」と「死』』19）。ヘスタの胸の「緋文字」は「尼僧の胸を飾る十字架と同じ効果を持っていた。それを身につけている人に一種の聖性を賦与し、どんな危険の中でも無事に歩くことができた」（163）とあるように、この「十字架」緋文字によって彼女は外界の敵「盗賊やインディアン」のみでなく、その内面の敵「情念」（passion）—チリングワースの場合と同じく、「蛇」と言ってもよい—をも胸の奥深くに封じこめることができたのである。

こうした彼女の「聖性」は、「篤志看護婦」（治療者）として飢饉や災害の折りの献身的行為として遺憾なく発揮されているが、後年の「予言者」（apostle）としての彼女の姿をこれに重ね合わせてみると、「聖母」マリアの「聖性」とイヴの「賤性」を併せ持つ彼女の両義性は、実は「シャーマン」的な二重性からも説明できるのである。

社会人類学の清水昭俊氏によれば、シャーマンというのは「火の本性を内面化した人間であるが、それに即応して、シャーマンは火と同様な二面的な価値をもっている。シャーマンは常人にはなしえないような術をなす超人的な人間であって、危機的状况では必ず頼りにされる一方で、平常時には畏れられ敬遠される危機的な存在でもある」（清水 68）ようで、これは「ヘスタが立っているときはいつもそうなのだが、ちょっとした空き地が魔法の環のようにその周りにできて、少し離れたところで押し合いへし合いしながらも人々は誰もその環に入ってこようとしなかったし、またその気もなかった」（234）という説明とも一致している。

ところで太陽神アマテラスが皇祖神として『記紀』に取り込まれた時点、すなわち『古事記』が成立した712年の元明天皇期には既にわが国では「至上の王権を太陽に比する日神信仰が成立していた」（山上35）ことになるが、この神話上のアマテラスのモデルになったのは、現実の伊勢神宮の「巫女」である「斎宮」（もしくは斎王。内親王＝未婚の皇女）であり、さらに遡って三世紀、邪馬台国の卑弥呼などが代表する「巫女王」であろうと考えられている。これら巫女の役割は第一に「靈界と人々の仲立ち」をする「口寄せ」（靈媒）であり、現代日本でも東北地方における「イタコ」と呼ばれる女性をはじめ、この種の「シャーマン」は今なお多数残存しているのである。

ヘスタの「巫女性」は次のようなパールの神秘性に触れた文章においても明らかであろう。

そんなことを考えていると、母親は霊を呼び出したものの、降霊の途中で手違いを犯した

ため、この不可解な新規の霊を手繰る呪文を入手し損ねた人間のような気がした。(93)

しかしながら日本でも、あるいはギリシャにおいても、シャーマニズムの最も古い形は、蛇を使つての「占い」であったようで『蛇巫女』と呼ばれた女性が存在したことが、日本では土偶によって確認されている(吉野 165)し、ギリシャにおいても「クレタ島のクノッス宮殿で蛇を飼育した蛇巫女像が発掘されている」(Hutchinson208)のである。この蛇を持つ「女神像」は、大地の豊穡に関係する、いわゆる「大地母神」(Earthen Goddess)、あるいは「太母」(グレート・マザー)と呼ばれる女神で、おそらく人類の最古の信仰を示していると思われる。このように 大昔、大地の女神のシンボルでもあった蛇は、神として人間から崇められた存在でもあった。ところが、ある時期、環境考古学の安田喜憲氏によれば、おそらくは「紀元前1500年から紀元前1000年頃の大きな気候変動(乾燥化、寒冷化)によって人類は蛇信仰を中心とする豊穡女神を捨て、農作物に成長をもたらす恵みの雨や嵐を支配する天候神ヤーヴェやパールなどの男神を信仰するようになった」(安田97;100-1)らしい。

このような人類の「蛇殺し」、 「太母」殺しの記憶－魔女のルーツもその辺りにあるようだ<sup>6)</sup>－が、のちに聖書を初めとする多くの「神話」における、英雄の「竜(ドラゴン=現実の蛇をモデルにして作り上げられた架空の怪獣)退治」として形を留めたわけである。

小説『緋文字』では、ディムズデールはチリングワースやヘスタ(彼女はディムズデールにとっては「母親」兼「姉」的な存在であり、「太母」にふさわしい貫禄を備えている)のような「蛇」=「竜」=「シャーマン」を退治(『記紀』のスサノヲの八俣の大蛇退治に対応する)して、ピューリタンの牧師としての「生」を全うすることができたわけである。これは彼が「人間の法にも従ったこともなく高邁な真理の光に照らされたこともない野蛮な異教の自然」(203)である「森」からピューリタン社会の環の「第一圏」に復帰したことと軌を一にしている。なお、パールはこのとき「父親」によって認知され、晴れて社会の一員に加えられることになるが、チリングワースの死後は彼の遺産の相続人となる。従ってこの遺産は、エーリッヒ・ノイマン流に言えば「竜」の体内から得た「財宝」ということになる(Neuman152-3)。

## 注

- 1) Fogleは『緋文字』の中から“light”と“shadow”の要素を丹念に抽出し、これらは単なる技巧や表現形式に留まらずテーマそのものと不可分に結びついていることを示している(Fogle 22-47)が、Mattheissenもまたこの作品における明暗の対比にいち早く注目した批評家であった。彼はまず作者の「光」の「操作」術に言及し、さらに最初の獄舎前の光景から終始一貫して“shadow”という語が強調され、それらが次第に増幅されて結びの一句へと凝集されていくことを論じている(Mattheissen 281-282)。
- 2) 現時点では「天の岩戸」神話が『緋文字』に与えた影響を示す直接の「資料」はない。しかし1841年、



## 「女神」誕生

難破・漂流中をアメリカの捕鯨船に救助され、米国本土で成人した「ジョン万次郎」の例もあるように、アメリカに漂着した日本船員が、彼の地で話題になった時代でもあった。従ってホーソーンがアマテラスやスサノヲ、さらに八俣の大蛇の神話を読書を通じて、また友人からの伝聞によって知っていたとしても決して不思議ではない。またペリー来航の2年前、ホーソーンに献じられた、メルヴィルの『白鯨』(*Moby-Dick, or the White Whale*, 1851) の第24章「弁護」(The Advocate)には次のような文章がある。

“If that double-bolted land, Japan, is ever to become hospitable, it is the whale-ship alone to whom the credit will be due; for already she is on the threshold” (Melville 100).

「もしあの二重に閉鎖された国、日本が、外人を迎えることがありとすれば、その功績を負わしめられるべきものもまた、捕鯨船のほかはない。それは今日すでにかの国の扉口に近づいてすらいるのだ。」(田中西次郎 19)

なお、ペリー自身は、1854年、二度目の日本航海を終えてその帰途、リバプールに立ち寄り、当時領事であったホーソーンに「遠征記」の執筆を依頼しているが、「やんわりと断られてし」(猪瀬12)まった、という逸話が残っている。

- 3) Hugo McPherson, *Hawthorne as Myth-maker* は、ホーソーン文学における神話研究として代表的なものであるが、比較の対象がギリシャ神話のみに限られている。今後は「日本神話」との影響関係を含めてもっと広範な世界の神話との比較研究が必要であろう。
- 4) 第七章「知事邸の広間」で甲冑に映ったヘスタの緋文字が歪曲・拡大されて示されるように、ピューリタン社会は、ヘスタにとって「生き地獄」であり、「牢獄」、「知事邸」はその象徴に他ならない。
- 5) ただし必ずしも筆者自身は、ヤングのこの仮説に賛同しているわけではない(神徳『ホーソーン文学の両義性』177-184)。
- 6) 例えば、ホーソーンが *A Wonder Book* (1852) の中で最初に取り上げている「ゴルゴンの首」は、ペルセウスに退治される「魔女」メデューサの物語であるが、その髪の毛が生きた「蛇」であるように、「蛇」(ドラゴン)を退治する英雄譚の典型とみなされる。しかし一説によればメデューサはもともとデメテルと同一の大地母神で、その祖型はメソポタミアのイシュタルと考えられており、同様にイシュタルを起源とする、アフロディテや、処女で狩猟の神アルテミスなどと並ぶ豊穰神であり、美しい巻き毛が自慢の美形の神であった。ところがあるとき、アテナと美を競ったために醜く恐ろしい「魔女」に変えられてしまったのだという。これはかつては大地の豊穰性と同一視された、神秘的な女性の出産力に対する畏敬——大地母神信仰——が多情で淫乱な娼婦性として唾棄すべきものへと貶しめられ、ヤーヴェヤバルのような天候神へと交替するその過程を神話的に表現したものかもしれない。

## 引用文献

- Eliade, Mircea. *Shamanism, Archaic Techniques of Ecstasy*, translated from the French by Willard R. Trask, Bollingen Series LXXVI, Princeton University Press, Second Printing, 1974.
- Felt, Joseph B. *Annals of Salem, from its First Settlement*, W. & S. B. Ives, Salem, 1827.
- Fiedler, Leslie A. *Love and Death in the American Novel*, A Scarborough Book, Stein and Day, New York, 1982.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter*, edited by William Charvat et al., *The Centenary*

- Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, Vol. I, Ohio State University Press, 1962.
- *A Wonder Book and Tanglewood Tales*, edited by William Charvat et al., *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, Vol.VII, Ohio State University Press, 1972.
- Hutchinson, R. W. *Prehistoric Crete*, Penguin Books, Baltimore, Maryland, 1962.
- Matthiessen, F. O. *American Renaissance, Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*, Oxford University Press, New York, 1974.
- McPherson, Hugo. *Hawthorne as Myth-maker, A Study in Imagination*, University of Toronto Press, Toronto, 1971.
- Melville. Herman. *Moby-Dick*, edited by Harrison Hayword et al., W.W. Norton & Company, Inc., New York, 1967.
- Neuman, Eric. *The Origin of Consciousness*, Harper Torchbooks, Harper & Brothers, New York, 1962.
- Rahve, Philip. “The Dark Lady of Salem”, *Partizan Review*, 8 (September- October, 1941), 362-381.
- Young, Philip. *Hawthorne's Secret, An-Untold Tale*, David R. Godline, Boston, 1884.
- アポロドーロス『ギリシャ神話』高津春繁訳、岩波文庫、1996年。
- 石田英一郎『桃太郎の母—ある文化史的研究』講談社文庫、昭和47年。
- 猪瀬直樹『黒船の世紀—ミカドの国の未来戦記』小学館、1993。
- 黒坂勝美編『日本書紀』上、岩波文庫、1987年。
- 呉茂一『ギリシャ神話』新潮社、昭和47年。
- 神徳昭甫『ホーソー文学の両義性』ニューカレント・インターナショナル、平成4年。
- 『日米文学の中の「生」と「死」—アニミズムの復権』近代文芸社、1998年。
- 佐々木宏幹『憑霊とシャーマン』東京大学出版会、1983年。
- 清水昭俊「火の民族学」『火—日本古代の探求』大林太良編、社会思想社、昭和49年。
- 武田祐吉『古事記』角川文庫、昭和46年。
- 多田元「天の岩屋戸」『日本神話・伝説総覧』歴史読本特別増刊、平成4年。
- 田中西次郎訳『白鯨』上下、新潮文庫、昭和60年。
- 松村一男「女性」『世界神話事典』大林太良編、角川書店、平成7年。
- 安田喜憲『蛇と十字架—東西の風土と宗教』人文書院、1995年。
- 山上伊豆母『巫女の歴史』雄山閣、平成6年。
- 吉田敦彦『ギリシャ神話と日本神話』みすず書房、1981年。
- 『日本神話の特色』青土社、1989年。
- 吉野裕子『蛇—日本の蛇信仰』法政大学出版会、1979年。
- (\*本稿は、1999年10月、富山大学で開催された日本英文学中部支部第51回大会でのシンポジウムにて発表した原稿に加筆、修正をしたものである。)